近藤教授プロフィール

センター研究員（東京大学大学院教育学研究科教授）　佐　藤　　学

本日はこんなにご列席いただきましてありがとうございます。コースの代表としてこんなに嬉しいことはございません。我々が慕っている近藤先生が今年60歳を迎えられました。東京大学全学としては61歳に定年が延びたのですが，我が教育学部はできる限り60歳でそれぞれ人事が流動化するようにと教授会で決定いたしまして，その意向をくまれてここに退官期を迎えられるに至りました。僭越ではございますけれども，近藤邦夫教授の履歴とそれから業績の簡単なご紹介をさせていただきたいと思います。

近藤邦夫教授は，1965年３月に国際基督教大学教養学部社会科学科を卒業後，同年４月に本学の大学院研究科修士課程に進学されました。1968年に修士号を取得後，大学院博士課程に進学されたのですが，翌1969年には助手に採用されました。以後，1975年に順天堂大学体育学部の専任講師として就職され，その２年後に千葉大学教育学部の専任講師として就職され，その翌年助教授に昇任されております。さらに1985年４月には本学東京大学教育学部教育心理学科の助教授に転任され，1994年４月に同学科教授に昇任，1995年４月からはちょうど大学院の重点化の時期でございまして，私も口外いたしましたけれども，是非とも新しい体制に似合った研究教育の充実のためにとお願いいたしまして，我々学校教育開発学コースの教授へと配置転換されました。以後，2002年３月まで研究教育に従事されてきました。

近藤教授のお仕事の中心はご存知のように臨床心理学でございます。しかし，従来の臨床心理学のように個人単位の臨床心理として研究されるのではなく，もちろん個人単位のこともされるのではありますけれども，グループあるいは集団，その社会の中における人々の苦悩，特に子どもと教師をめぐる苦悩の問題を焦点に研究され，そういう意味ではシステム的なアプローチと従来の臨床心理学的なアプローチとを巧みにといいますか，非常に慎重にかつ丹念に検討されるような分野を開拓されてきました。今日では，我々は臨床心理学の仕事の大きな領域の一つに学校という場を設定することはいわば常識となっておりますけれども，学校臨床心理学という領域のいわば日本における開拓者といってもよろしいかと思います。ちょうどこの時期，学校カウンセリングの問題が巷では話題になり，そのあり方が問われた時に，いち早くカウンセラーの仕事と同時に教師の仕事の部分にも研究領域を拡大され，いわば教師とカウンセラーの狭間にある問題を展開されてきたわけです。教室内での子どもへの対応，近藤さんの言葉でいえば『コーピング』という言葉が僕には印象的なんですけれども，問題そのものにどのように対処し，その関係を修復していくかというような，いわば丹念なレベルにおけるRCRT法として知られている調査研究方法なども駆使しながら，学校生活にかかわる教師と子ども，あるいは親をめぐる問題の，さまざまな個別のケースとそれをめぐるシステム（社会）の問題というような，つなぐ仕事をされていったように思います。なお，その間，心理教育相談室をはじめ，さまざまな実践教育における仕事を日々重ねられてきたことも皆様ご存知のとおりでございます。その仕事の代表的な部分としては，『教師と子どもの関係づくり』という東京大学出版会の非常に貴重な本がございますし，あるいは『子どもと教師のもつれ―教育相談から―』といった岩波書店からの本がございます。その他，今申し上げました領域において数多くの共著書，編著があり，あるいは皆様があまりご存知ないかと思うのですけれども，貴重なエリクソンをめぐる翻訳がみすず書房から３冊ございます。これらは極めて丁寧な翻訳で，翻訳の能力に関して非常に感服しておりますけれども，エリクソンの理解に関する仕事においても非常に貴重な成果をあげられてきました。さらには，学校臨床学，あるいは，非行や不登校をめぐる問題等々を幅広く捉えるための翻訳書，あるいはそれをめぐるさまざまな学術論文というものを展開されてきたわけであります。また，学内においては，新しく重点化されました学校教育開発学コースではコース長を務められ，その後，我が教育学研究科の一つの実践的な焦点になっております学校臨床総合教育研究センターにおいては，構想から企画の段階，あるいは文部省との折衝の過程に至るまで，２年間その中心にあたってセンター設立に貢献してこられました。そして，初代セ

この文章は，近藤先生の最終講義の際に行われた，佐藤学教授（学校教育開発学コース主任）による紹介をテープ起こししたものである。

ンター長を務められ，学校あるいは学会の仕事に関しても，もう省略いたしますけれども，多大な貢献をされたと思います。

私は近藤先生とは15年になるかと思います。いつもにこやかにスマイルで接する間柄で，これまで近藤先生とはまじめな話はあまりしてこなかったわけですけれども，今日はちょっとまじめに話します。私は近藤先生を非常に尊敬しております。これは皆様の思いと共通の部分がたぶんあるのだと思いますが，近藤先生の何よりもの学問的魅力，あるいは実践的魅力の根底には，苦境に立つ人々に対する想像力という問題があると思います。私は数多くの研究者と知り合っておりますけれども，近藤さんほど苦境に立つ子どもや教師に対する想像力にあふれた人を知りません。それから，なおかつ，さまざまな苦境を受け止める優しさをお持ちで，たぶん長い長い仕事の中で近藤さんは人々の苦悩を引き受けることによって，ある場合はご自身のお体を壊され，とても見ていられない時がありましたが，そういう部分を内側に秘めながら仕事をされてきたように思います。その意味では近藤さんは絶えず孤独の人であり，孤独と闘ってきた人であり，また自らの健康と闘ってきた方だと思います。にもかかわらず，このおだやかな表情とユーモラスなスマイルが魅力でございまして，「ムーミンパパ」と呼ばれるようなお人柄を今後も是非是非生かしていただいて，こういう煩わしい公務からはずれて自由な仕事と研究，あるいは生活に従事していただければと思います。本日の最終講義のテーマも，まさしく，おそらく東大で初めてだろうと思いますけれども，いかにも近藤先生らしいタイトル，『思い出』でございます。どのようなお話が展開されるのか，私も最後の講義でございますけれども，近藤先生に学んだ学徒の一人として今日の講義を楽しみにしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。